

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.272

2026.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

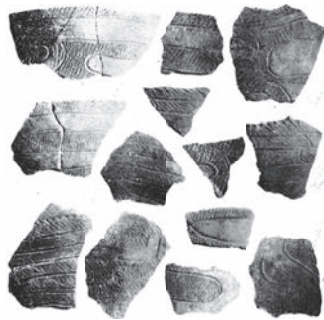
— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第69回 ● 解脱する「緩衝系列」

『図譜』B2式は印旛沼南岸の比較的近距离にある遠部包含地と江原台遺蹟の両者から層位的に出土し、希少な形態を除くと形態・装飾の類似する複数の標本が主として器種別に選定されるが、「土器型式」の構造は「異器種「範型」間相似文様帯」（「精製土器様式」の深鉢・鉢・浅鉢等の異なる器種「範型」の間で同質・類似の文様帯を共有）に特徴を知る。この器種を超えて同質或いは類似する文様帯を形成且つ共有する「土器型式」の基本的な性質は、『図譜』B1式から既に見られ、更には「B3式」の導出にも重要な特徴の一つとなり、「安行1式」でも同様である。

また、『図譜』B2式の標本には選定されないものの、遠部包含地では「B2式」の「奥行」として層位的に出土する「(半)精製土器様式」の第79図があり、学史的に「遠部第5類土器」として示される。第79図は縄紋施文共通の特徴とし、幾何学形磨消縄紋（「緩衝系列」8点と「大森系列」1点）や括れ部相当を刻文帯とする胴部縄紋地並行沈線文（「下総系列」4点）の断片のみ13点であり、「遠部系列」と層位的な伴存関係を示す遺蹟での良好な標本が強く望まれ、21世紀に至る。



▲第79図：学史上の「遠部第5類土器」

「B2式」の学史的資料を振り返ると、大森貝塚でも「遠部第5類土器」と類似の幾何学形磨消縄紋が、深鉢・浅鉢・壺等器種を超えて『図譜』B2式の如く相似の文様帯を共有する等、「土器型式」の最小構成に着目した意義を概観しており（文献1980b）、引用し参考に供したい。

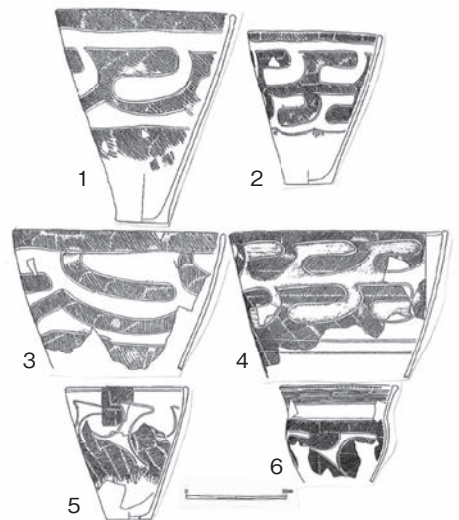
即ち、「遠部第5類土器」については「まず、磨消連弧文の混入を指摘しておこう。遠部系列と大森2式が並行すると考えられる物的証拠である。次には重要文化財指定土器例品中にも見られたいわゆる「J」の字状の磨消縄紋土器群である。加曾利B式（中位のごさ）の解説において、「体部の装飾としては磨消縄紋があるが、並行線化したものは少くなり、性質が変わって来る」とされたものの一つである。この磨消縄紋土器群の分布範囲は広く、恐らく関東北全域に及ぶのではないかと思われる。したがって、広い範囲の地域を一挙に結ぶ文様系列として複雑多岐にわたる分析が必要とされている。一方では、明かに南奥の注口付土器（重要文化財指定土器参照）も搬入されており、問題の深層はなお図り難いのが現状である。大局的にはこの「J」の字状の磨消縄紋手法は、関東北の文化交渉の融合性を、特に緩衝的作用の面から具体化したものと考えられるのである。したがって、加曾利B2式遠部系列とは切り離して考えた方が良いであろう。こうした系列に対する適当な命名法を持ち合わせていない現在、仮りに加曾利B2式緩衝系列とも呼んでおこう。（以下、「常陸系列」は後に「吉見台系列」として吸収、続いて「下総系列」へと続くが、ここでは省略に従う）との視点は今日でも維持・牽引する。

東大人類学教室が保管する貝塚出土資料を熟知、「遠部第5類土器」の使用を控える山内清男も『図譜』B2式で「性質が変わって来る」旨の解説に止める真相には深い関心を寄せ、「「J」字状磨消縄紋土器群」となる大森貝塚（波状口縁鉢）と椎塚貝塚（突起形脚付平縁鉢）・福田貝塚（波状口縁台付浅鉢）、そしてやや変容する姥山貝塚（突起付平縁深鉢）の諸例を続け様に同定・紹介する（1958）『世界陶磁全集』第1巻、（1964）『日本原始美術』Iが、層位的な伴存関係及び器種「範型」による土器群の構成は前述の通り未明である。

今日に至る発掘調査の大規模化と出土資料の爆発的な増加により、「遠部第5類土器」と同等に分類される範疇も拡張し、「遠部第5類土器」相当へと抜本的な見直しを迫る。学史的な「奥行」は（文献2009）を契機とするが、新たな展開として拡張「混成」からの解脱が顕著となる。即ち、常南総北に「中妻系列」の「道統」は「B2式」まで承継する状況が確認され、先ず印旛沼南岸では「B2式」初頭「吉見台系列」が成立し、前回は印旛沼北西岸西根遺蹟第4集地点では「半精製土器様式」の器種「範型」が「続中妻系列」→「西根系列」となる変遷組列を成す。

さて、改めて西根遺蹟第4集地点に注目するならば、拡張「混成」からの解脱に止まらず、特徴ある「緩衝系列」や「大森系列」の安定的出土こそは「遠部第5類土器」からの解脱に相応しい。

第80図は解脱した「緩衝系列」の主要な標本である。1~5は直線的な深鉢を呈し、1~4は「遠部第5類土器」の中核的文様帯である「「J」字状磨消縄紋土器群」となる。1・2は口縁部を帯状縄紋帯とし、その直下から無文部の「J」字状磨消縄紋帯とし、1は縄紋帯の下端を弧線文で区画し、2は上下を点対称に反転させ、下端を弧線文で区画する。3・4は1・2の無文部と縄紋帯を反転させ、口縁部から直接「J」字状磨消縄紋帯とする作法である。5は「J」字状が背中合わせで左右線対称に組み合わせる「「J」字状左右線対称磨消縄紋土器群」と呼ぶ変容した文様帯である。6は胴部に5の「「J」字状左右線対称磨消縄紋土器群」を共有するも体部が縮約する深鉢で、器種「範型」を異にする。



▲第80図：西根遺蹟第4集地点の「緩衝系列」

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 解脱する「緩衝系列」(第69回)

鈴木正博 …1

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト (第264回)

山崎公輔 …3

■考古学の履歴書 私の考古遍歴 (第20回)

工業善通 …2

■考古学者の書棚 『江戸東京移行期論』

藤掛泰尚 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第20回)

工楽 善通

マンチン防壁集落遺跡を歩き回った後、F.Su.さんの車で目的のドイツ考古学研究所のミュンヘン支部へ到着したのはもう夕刻だった。市の中心部に近く、あの有名な仕掛け時計のある市役所にも近い所で、二階建ての貸ビルの一角を占めていて、私のゲストルームもそこにあった。常駐している職員は誰もいないらしく、外食で4泊した。翌朝F.Su.さんから、こっちは支部は金石文関係の研究者が2名ほど居て、普段は教会などの調査に出ていて、ほとんどいないのだと言っていた通り、所内はひっそりしていた。話の後すぐさま市内散策がてら3kmほど離れた、待望のドイツ博物館へ徒歩で行った。石造りの建物がいくつか連なっており、地下で結ばれたりして、ほんとうに広く時刻の閉館まで居て疲れた。最も印象的だったのは、炭鉱などの鉱山技術をジオラマを使った復元展示で、実際に坑道へ入っている雰囲気、とても館内に居る情景とは思えなかった。他の機械展示や自動車・飛行機部門も充実していて、科学技術博物館の観が強い。歴史の展示に関しては何も頭に残ってない。

次には広大な英国庭園脇にあるバイエルン州立博物館を訪ねた。19世紀中頃に創設したらしく、建物は20世紀初頭に建てられたもので、石造りの重厚な建物だった。ドイツ東南部バイエルン州の民俗資料や美術品が主な展示品であったので一巡して外へ出た。地図を見るとすぐ近くに先史博物館と小さく書いてあるので行って見ると外観は二階建てのそれほど大きくない新しい建物であったが、入ってみるとれっきとした考古博物館であった。特に印象的だったのは新石器時代後期頃の土器で篋描きした沈線の中に、貝殻などの白い粉末をすり込んで白線化した文様の一群の土器が、壁面やケースの中に所狭しと並べられた部屋は圧巻であった。またローマ時代の部屋では、この地方で発掘された大小の彫像や、美しいモザイク装飾が陳列されていて、ここでも古代ローマの繁栄ぶりに驚いた。売店で過去に開催した特別展のポスターを売っていたので、細石器を拡大して配したのなど買い、巻いて持ち歩いてた。そうだ！もう買い求めたポスターは20枚ほどにもなるので、それを納める紙の筒を買おうと思った。帰路、宿舎は大学の近くのので、文具店はすぐ見つかったが、さて英語でどう説明したものか…やっとなんか手に入れることができた。持ち歩くには都合よくなったが、これが後々難物となった。移動する各空港の検問で、中を広げて見せるという事になり往生した。

ミュンヘン滞在中、土・日曜日があったので、思い切って列車で約1時間のオーストリアのザルツブルグに行くことにした。ここはモーツァルトの生地映画「サウンド オブ ミュージック」の舞台となった町でもあり、ヨーロッパのB.C.600年前後の鉄器時代前期のハルシュタット期の名称となった町が、50km離れた所にあるので、できればそこへも立ち寄りたいたと欲を出した。ザルツブルグ駅では改札でパスポートを見せるだけで外へ出られた。まずモーツァルトの生家へ行き、彼の使ったピアノや展示物を見学したあと、案内地図を見ながら、映画の場面でドレミの歌をうたっていた美しい庭園を散策して通りに出ると案内所があって、ハルシュタット行きを尋ねるとTAXI以外に方法はないとの事で諦め、ホテルだけ確保して1泊することにした。翌日は一番に世界一美しい町ザルツブルグの顔とも言える、町を紹介する写真でよく見かけるh500m余の丘上にあるホーエン・ザルツブルグ城にケーブルカーに乗って行った。城館の南窓からは、アルプスの山々が望まれる素晴らしい眺望であった。丘を降りて、少し離れた所に市立博物館があったので見学した。

ミュンヘンへ戻り、二日後にはドイツを去り、予定のロンドンへ向かった。ヒースロー空港で4泊だけの安ホテルを予約した。市中心部の北西にあたる地下鉄駅に近い所で、道路にゴミの散らばった汚い町であった。

翌日一番に大英博物館に行った。地図を見ながら館へ向って裏道を歩いていると小さな古本屋があって、棚を眺めていると、ハードカバー本で、F.ペトリ著の『最近10年のエジプト考古学』を見つけ、奥に座っていた

老人に、値引きしてもらえないか尋ねると、「これは偉い先生の書物だから安くはできない」と断られたので値札通りで買った。

待望の大英博物館は入り口を過ぎて少し歩くと、左右にわかれ、右に進むとそこは大きな丸天井の大英図書館であった。近世文豪の原稿や原本がケースに入れられて展示してあったが、歴史展示の方へと進み何室か目にかの有名なエルギン・マーブルの部屋に入った。これは古代ギリシャ アテネのパルテノン神殿にあった大理石の浮彫群で、19C前半に当時の英国大使が持ち出したもので、ナポレオンが持ち去ったロゼッタストーンと共に、この大英博の目玉展示物となっているもので、私はここで両者を見学できたことで満足感に浸った。しかし、その後1980年代になって、このような文化財を元あった母国、原保有国から相次いで返還要求が出されることになった。このエルギン・マーブルも2004年のアテネ五輪開催を機に、ギリシャ政府から返還要望が出されたが、ルーブル美術館やN.Y.のメトロポリタン美術館など欧米の18博物館・美術館から共同で「文化財は人類共通の財産だ」「世界中の人々に公開奉仕している」という理由をつけて、返還に応じないアピールを出している。今では3D技術によって質の良い複製品が作られるので、当事国どうして話し合っただけで円満に解決できないだろうか？

ロンドンに滞在中2泊3日の予定で近郊にある遺跡見学に出かけた。ソールズベリーにあるストーンヘンジでは、写真で見るとは違って、各石材の大きさに驚くと共にその加工に感心した。翌日にはバスとヒッチハイクで、シルバリーヒルとウェスト・ケネットロングバロー遺跡を歩き回って見学したのは思い出深い。さらに次の日はホテルを早く出て、リッジウェイ(古代道)を歩くつもりで地図を見ながらストーンサークルのエイヴェリーを訪ねた。遺跡地の中にある小さな教会で、遺跡に関する展示があり、その売店に数十年も前に出版されたG.ダニエル著の報告書を売っていたので、これは貴重本と思い、奈良の研究所用に何種類か買った。午後スインドン駅に出て、ロンドンに帰った。翌日は午後パリへ発つ日なので、観光にテムズ川にかかるタワーブリッジにタクシーにつれて行ってもらい、ヒースロー空港に向かった。

パリ空港で宿を探してもらったら、中心部に近く名高いモンマルトルの丘下であった。翌日は一番にルーブル美術館へ行った。入館料は数百円で1日有効券らしく、昼食時に外出し、また戻ってきて入館しても良いという。ルーブルには2日通った。初日は館の絵画の展示が遠くに見える食堂を利用したが、2日目は外へ出た。モナリザ像の絵の前にはやはり人が多く少し眺めただけで、サモトラケの二ケ像とミロのヴィーナスへと足を運んだ。この2体とも母国への返還要求が出ている文化財である。パリでは東洋文化の粋を集めたと言われるギメ美術館と、近郊のサンジェルマン・アン・レーにある国立先史博物館へ行った。旧石器文化研究のメッカとも言える館で、展示も充実していた。細石器の1点1点を、真鍮の針金で壁にずらりと固定していた展示は、初めて見る手法で感心した。参考書などでよく見る後期旧石器時代のブラッサンパイ出土の骨角製女性頭部像が、ここで見られるとは思わず入館し見学できたことは、今回の2か月に及ぶ博物館巡りの締めくくりに相応しい見物であった。

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務局勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 264

近江国府跡 国庁跡 惣山遺跡 青江遺跡 中路遺跡 ～滋賀県大津市 — 山崎 公輔

近江国府跡は、滋賀県大津市南部の瀬田地域に所在する、弥生時代～中世の散布地・官衙跡として周知されている遺跡です。瀬田地域では琵琶湖唯一の流出河川である瀬田川が京都府の宇治川や淀川へと流れ出ており、その左岸には瀬田丘陵が広がります。近江国府は瀬田丘陵上に展開しており、琵琶湖や瀬田川を見下ろすことができる高台に位置しています。ここに位置する近江国府は、大国近江の政務を司る官衙施設でした。国守には、奈良時代中期に平城京で絶大な権勢を奮っていた藤原仲麻呂(恵美押勝)などの有力氏族が歴任しており、近江国がいかに重視されていたかが伺えます。

奈良時代には、瀬田丘陵に近江国府の中心的施設である近江国庁や、国府に関連する近江国庁跡や青江遺跡、惣山遺跡、堂ノ上遺跡などの官衙施設が相次いで造営されます。発掘調査事例として特に著名なのが近江国庁跡です。近江国庁跡は昭和39年度の発掘調査において瓦積基壇の建物群やそれらを取り囲む築地塀などが検出されており、全国で初めての国庁跡の発掘調査事例として、学史上重要な遺跡として知られるようになります。その後、近江国庁跡は昭和40年に史跡として仮指定、昭和48年には国指定史跡となり、範囲確認調査が数次にわたって実施されました。平成10・11年には、国庁東側の区画である東郭の発掘調査が実施され、全国的にも珍しい木造外装基壇を伴う建物がその中心部分に存在することが明らかとなりました。さらに、その後の発掘調査によって政庁西側にも区画(西郭)の存在が指摘され、近江国庁は政庁を中心とした3つの築地区画を伴う特殊な政庁構造であることが明らかとなりました。このように、近江国庁跡は数次に及び発掘調査を経ることで、その規模や構造が明らかになりつつあるといえるでしょう。

近江国庁の関連施設として、南北12棟にも及ぶ倉庫群とされる惣山遺跡や、官僚施設と推定される青江遺跡、勢田駅とされる堂ノ上遺跡などの官衙施設も同時期に造営されるようになります。その他にも近江国分寺と想定される瀬田廃寺や、日本三大名橋に数えられる瀬田川に架かる瀬田の唐橋(唐橋遺跡)があり、これらの遺跡もまた、滋賀県や大津市の発掘調査によって次々と姿を現すようになりました。古代において、近江国

の政治の舞台が当該地に展開していたことを示す重要な資料として数えられます。

このような性格から、現在国庁を中心とする遺跡は昭和48年の国指定史跡以来、順次追加指定する形で、国指定史跡「近江国府跡 国庁跡 惣山遺跡 青江遺跡 中路遺跡」として位置付けられています。近年、これらの遺跡は滋賀県や大津市によって公有化が進められており、地域住民をはじめとする方々に向けて活用が図られています。特に近江国庁跡では政庁東脇殿の築地塀や東郭の木造外装基壇の模型が現地に復元されており、人々の憩いの場として活用されています。ぜひ現地に訪れた際には、この築地塀に注目していただきたいと思えます。復元された築地塀は発掘調査成果に基づき、瓦積み基壇や雨落ち溝を伴うほか、屋根には瓦が葺かれているところまで復元されています。この軒瓦の瓦当文様をよく観察してみると、近江国府関連施設の遺跡から出土するものと共通の文様である「飛雲文」があらわれていることが見えます。築地塀の復元を担当された、当時の方々の細部へのこだわりが伺えます。この記事を読んで興味を持たれた方は、現地に赴き、古代の風景に思いを馳せみてはいかがでしょうか。

最後になりますが、近江国府跡やその関連施設の発掘調査は現在に至るまで各所で緊急発掘調査に伴い実施されています。そこでは、国府が最盛期を迎えた奈良時代の遺構・遺物だけでなく、それ以降の平安時代や鎌倉時代のものも多く確認される傾向にあります。特に注目されるのが、近江国庁跡より北側の地点で梁間1間の細長い掘立柱建物や平安宮で出土事例の多い白色土器が多く確認される点です。これは、平安宮の女性皇族が「斎王」となるため斎宮に向かう(「斎王群行」)その道中に立ち寄ったとされる仮舎やそこで用いた土器類と考えられます。国府の機能が形骸的になってしまった時期においても人々は瀬田丘陵の地を重視し、活用していたことを示す証左でしょう。今後は、こういった調査成果も踏まえた近江国府跡の歴史的评价もしていくで、古代日本の歴史的解像度が上がるものと考えています。今後の調査・研究が期待されます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは原田 岳さんです。



▲復元された政庁東脇殿の築地塀



▲屋根に用いられた飛雲文軒瓦

考古学者の書棚

「江戸東京移行期論」

大石学・落合功 編／戎光祥出版(2024)

藤掛 泰尚

私が紹介したいのは「江戸東京移行期論」という書籍である。本書は文献を主体とするものであるが、興味深い内容であると感じている。内容としては江戸から東京への展開を考察して明らかにすることを目的としたものである。本書の構成は第1部では近世から近代への移行を対象とする研究の潮流と視点を俯瞰し、第2部で江戸東京を地域的な視点から論じている。第3部では江戸から東京への連続性と非連続性を様々なテーマから明らかにしている。

本書をおすすめするのは、わたくしの勤務する東京都中野区を横断する青梅街道沿いを調査したことがきっかけである。青梅街道は1606年(慶長11年)に青梅の石灰を江戸に運ぶために整備した街道である。その後は甲州街道の脇往還として機能し、青梅街道でも中野宿は最も栄えた宿であるとされ、絵図では人々の往来が盛んだった様子が見て取れる。その発掘調査では近世の遺物が出土し、さらに近代の遺物はより多量に出土した。調査地点は中野宿の場末に位置していたところで、近世段階では宿としての痕跡が見え始め、近代になり都市化が進んでいったのではないかと臆気ながら感じたことがあった。このことから江戸の周縁部が都市化していったのはいつなのか、そもそも何をもって都市化したと言えるのかという疑問があった時に本書を手にした。

一般的に江戸の範囲については墨引線の範囲、江戸払いの範囲、高札場に提示された範囲、幕臣の外出許可願いの範囲、朱引線の範囲などいくつか解釈がある。しかし実態として明確に分けられていたわけではなく江戸は拡大し続けており、この不明瞭な地域を歴史学の中では「江戸町続」地域とし、形式的には村でありながら江戸の都市拡大に伴って都市へと編入されていく過程の地域だとされている。本書でも「江戸なのかどうなのか」曖昧な領域を「江戸町続」と定義している。

本書は複数の著者が分担して執筆をしているが、特に「江戸町続」地域形成過程と江戸・東京—「江戸周辺の社会史」をきっかけとして」と「近世後期における江戸周辺地域の家作利用と生業」を紹介したい。前者は角筈村、後者は中野村(中野宿)を分析対象にして論じている。なお角筈村は現在の東京都庁周辺の地域で中野村に接した場所である。

角筈村では元禄年間には既に江戸と町続の状態となっていたようで、「町」の要素が村へと入り込み景観が変わっていったことを指摘している。さらに宝暦から寛政期になると町と村の境界は不明瞭になり代官支配と町奉行支配の見分けがつかなくなり、行政制度上でも実態と合わなくなってきたことが史料上確認されたと指摘されている。さらに村に居住する人々も町奉行支配地域であると強く認識し始めたこととされ、支配者側が進

めたことではなく、後追いで実態に沿うように江戸の範囲を再規定していったと論じている。

後者の中野村では延宝年間には明確に代官支配地域の村であったが、宝暦から寛政年間には百姓商売家が増加しており、確実に町場としての性格を帯びていったことが指摘されている。宿場で取り扱った商品も一般的な雑貨類だけでなく、水茶屋や居酒屋などで酒、菓子などの嗜好品を取り扱い、街道を往来する人々を対象にした商売が多かったことから、商品経済が浸透していたことが分かる。また文化年間には中野村側から新規町並家作の願書が代官へ提出され、営業場所の拡大を企図とした動きがあったと評価されている。このことから景観だけでなく制度上でも村から町へと変容していったことが理解できる。

本書の内容から中野村周辺では18世紀前半頃から町としての景観が見え始め、18世紀半ば以降は町場の景観が広がっていたことから「江戸町続」であったと考えられる。また地域の人々も江戸に含まれるという意識があったことが指摘されている。これは中野宿に限らず江戸周辺の街道沿いでも同様の状況であろう。

考古学的な視点で考えてみると、これまでの都内の発掘調査で17世紀前半段階の遺構や遺物が集中して出土するのは、現在の千代田区、中央区であり、その他では当該期の遺構や遺物は少なく、時代が下るにつれて徐々に周辺へ広がっていったことを意味している。江戸周縁部の地域の考古学的な評価が進めば「江戸町続」または「江戸(東京)」に含まれるという解釈も十分考えられると思われる。では考古学的には何をもって江戸(都市)なのか、評価が難しいところではあるが、以前に農村の調査をした際に感じたことは趣味、嗜好的な遺物が少なく実用的なモノで構成されていた。例えば文房具、化粧道具、喫茶具、灯火具等の有無である。このことから文化的に多様なことを行っていたかどうか都市的な生活を送っていたかの指標にはなりそうである。それを明らかにするには考古学は物質文化を対象とする学問であるため、遺物組成からアプローチして評価することは有効な手段ではないかと考えられる。

自身の独り言のような内容になってしまったが、本書は都市と都市ではない地域の空間的なグレーゾーンだけでなく、時間的なグレーゾーンにも焦点を当てて書かれた内容である。扱う資料や解釈によってどこの何を画期にするか考えるきっかけになると思われる。特に歴史考古学に興味を持っている方にはおすすめの内容である。

アルカ通信 No.272

発行日 2026年5月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp